

JDDW2019 第 98 回日本消化器内視鏡学会総会 市民公開講座【報告】

2019 年 9 月 22 日(日)、青森県弘前市のホテルニューキャッスルで、「短命県返上へ！おなかのがんから身を守る」と題し、JDDW2019 第 98 回日本消化器内視鏡学会総会 市民公開講座が開催されました。

1 つ目の講演「これからの内視鏡医療～内視鏡はどこまで進化しているのか～」では、田尻久雄先生(東京慈恵会医科大学 先進内視鏡治療研究講座 教授／日本消化器内視鏡学会特別顧問・前理事長)が、日本におけるがん罹患率・死亡率の推移や、都道府県別のデータ・内視鏡専門医数と大腸がん標準化死亡比を提示され、青森県における大腸がん死亡率減少を目指した「青森プロジェクト」について解説されました。これは総合司会の福田眞作先生(第 98 回日本消化器内視鏡学会総会会長／弘前大学医学部附属病院院長／日本消化器内視鏡学会副理事長)が研究責任者を務められる青森県の保健事業の一環で、検診を受けてこなかった働き盛りの 50 代を対象に、無料で便潜血検査・大腸内視鏡を施行する機会を与えるというものです。また、青森県民の食生活をはじめとした特徴を提示され、生活習慣の改善を心がけること(食生活では赤肉・保存肉の多量摂取を控え、野菜など高繊維食を多く摂取し、体を動かして運動不足に注意するなど)も大切であると呼びかけられました。

2 つ目の講演「食道がん、胃がんの内視鏡診断・治療の最先端」では、井上晴洋先生(昭和大学江東豊洲病院 消化器センター 教授／日本消化器内視鏡学会理事長)が、胃がんの主な危険因子はピロリ菌であり、近年、ピロリ感染の有無を考慮した ABC 検診が導入されつつあること、食道がんの危険因子としての喫煙と飲酒の説明をされ、とくに現在あるいは過去にコップ 1 杯のビールを飲んだだけで顔が赤くなる(あるいは、なっていた)人が長年大量飲酒を続けると発癌リスクが高まることなどをお話しされました。また、食道がん・胃がんの外科手術の実際の動画を提示されながら、外科手術も身体への負担の少ない方法に変わってきてはいますが、内視鏡検査による早期発見・早期診断によって内視鏡で治療できれば、患者さんの QOL(生活の質)はより良好であると強調されました。

3 つ目の講演「増え続ける大腸がんから身を守るために」では、田中信治先生(広島大学大学院医系科学研究科 内視鏡医学 教授／日本消化器内視鏡学会副理事長)が、アメリカの人口は日本の約 3 倍にもかかわらず、大腸がんて亡くなる人の数は日本の方が多いいことを強調されました。その一因として日本の検診受診率の低さ・検診で陽性になっても精密検査を受けない人が多いことを挙げ、早期に発見できれば内視鏡でがんを治療することができることを実際の動画を用いて紹介されました。田中先生は、大腸内視鏡はまったく恥ずかしい検査ではなく、健康診断の便潜血検査で陽性になった場合は必ず信頼できる病院で内視鏡検査を受けてほしいと、強く



呼びかけられました。

講演に続いて行われた質問コーナーでは、「AI がすべて診断する将来が来るのでしょうか?」、「先進国の日本で検診受診率が低いのはなぜですか?」、「内視鏡は鼻からがいいですか、口からがいいですか?」、「オエっ
てならずに楽に内視鏡検査を受ける方法はありますか?」、「ピロリ菌はいないと言われたのですが、がん検診は受けた方がいいですか?」、「大腸内視鏡検査で痛い人と痛くない人がいるのはなぜですか?」などの質問に対し、先生方が丁寧に回答されていました。



写真:左から、田中信治先生、井上晴洋先生、田尻久雄先生

最後に、田尻先生、井上先生、田中先生から、「本日会場に来られた皆さんは、生活習慣や検診に対する意識が高い方々だと思いますが、皆さんの口コミでぜひ周囲の方々にも『内視鏡検査は怖くない! 検診を受けよう』と伝えてください」とのお願いがあり、総合司会の福田眞作先生が「皆さんのお力をお借りして、いつの日か短命県を返上したい」との決意を述べられ、市民公開講座は盛会のうちに終了しました。

台風の迫るなか、またリンゴの収穫でお忙しいなか、会場に足をお運びくださいました皆さま、ありがとうございました。



写真:福田眞作先生



写真:会場の様子

第 98 回日本消化器内視鏡学会総会事務局 準備委員長
弘前大学医学部附属病院 光学医療診療部 副部長
三上 達也